

第一章

人類の罪深さの事実に見れた原罪の証拠

第一節

すべての人類は絶えず、いつの時代でも一つの例外もなく、道徳的悪に突き進んでおり、この道徳的悪によって、人類は完全に永遠の滅亡に至り、神にまったく好まれず、神の復讐と怒りを受けることになる

神学者たちが原罪という言葉で普通に考えてきたことは、心が生まれつき罪に染まり、堕落しているということである。しかし、原罪の教義が話題になるとき、通俗的にはもっと広い意味で、単に本性が堕落しているというだけでなく、アダムの最初の罪の転嫁が語られていると理解されている。言い換えれば、アダムの子孫が、神の審判において、アダムの罪の罰を受ける受刑者として連座することを意味すると考えられている。私を知る限り、「本性の堕落」と「アダムの罪の子孫への転嫁」のうち「一方を信じた者のほとんどは他方も信じてきた。そして、一方に反対してきた者のほとんどが他方にも反対してきた。これからの議論で特に取り上げる著者「テイラー氏」も、原罪論に反対する著作のなかでこの両方に反対する。私たちのこれからの考証によって、原罪論に關して、この二つが密接に關連しており、一方を証明する議論は他方を証明すること、つまり一方を認めるなら他を認めることにも困難がないことが明らかになるであろう。

私は、とくに「本性の堕落」という観点から原罪論の考察を始めていこうと思う。論じていくうちに、關連して他方「アダムの罪の転嫁」も自然に考察されるようになるであろう。



森本あんり ◆国際基督教大学教授 われわれの靈的賦活と知的成熟のために

ジョナサン・エドワーズは、アメリカ独立前のピューリタン牧師で、神学や哲学ばかりでなく美学・倫理学・文学・歴史学・社会学・心理学・言語学など多方面にわたり今日までアメリカ思想に深甚な影響を与え続けてきた神学者である。創立間もないイエール大学に学び、ロックやニュートンに触れて大胆な自然哲学を開拓、マサチューセッツの教会に赴任して二度にわたる大きなリヴァイヴァル（信仰復興運動）を導いた。その発端となった説教は、アメリカ・キリスト教史を通してもっとも有名な説教の一つである。やがて陪餐資格をめぐる対立から教会を離れ、辺境の先住民寄宿学校へ転任。そこで主要著作を執筆するうち、現プリンストン大学の第三代学長として招聘されたが、種痘が災いして着任後まもなく没した。

改革派の伝統においては「カルヴァンとバルトの間の四百年に生まれた最大の神学者」とも評されるエドワーズだが、その評価は20世紀の「ピューリタン・ルネサンス」以降さらに高まった。ニューバーラの示す深遠なアメリカの自己理解や人間論や歴史哲学もエドワーズ思想の継承だし、福音派の伝統では彼が編纂した先住民への宣教師の日記が今日まで信仰修養の手引きとして広く用いられている。イエール大学出版局は、半世紀をかけて彼の全著作を校訂し出版してきたが、その数は紙媒体だけで26巻に及び、さらにそれを上回る量の資料が電子媒体で公開されている。

今般、新教出版社の英断と訳者たちの努力により、その枢要部分が邦訳され出版されることになった。日本のキリスト教界の靈的賦活と知的成熟のために、本翻訳選集が用いられることを切に願っている。

● すいせんの言葉



出村 彰 ◆東北学院大学名誉教授 知性と靈性、理性と敬虔との比類なき統合

半世紀以上も前の留学時代、アメリカ教会史演習を選択した際に与えられた論題は、エドワーズとロックの対比だった。辛苦の末の報告だったが、いまだに苦い悔悟の念を忘れられない。この度、エドワーズが邦語で読めるようになる。近刊予定の第六巻冒頭で、権威の源泉は「経験と聖書の証言」とあって、いささか安堵している。しかも、エドワーズが先頭に立った信仰復興運動なくしては、世界宣教、日本への伝道も考えがたい。知性と靈性、理性と敬虔との比類なき統合こそは、エドワーズの真髓と感じられる。永らえて、企画の完結から多くを学びたいと願っている次第である。

統合こそは、エドワーズの真髓と感じられる。永らえて、企画の完結から多くを学びたいと願っている次第である。

● 翻訳チームに加わって



大西直樹 ◆国際基督教大学名誉教授 私たちの目前に初めて広がる驚愕の世界

エドワーズは、ベンジャミン・フランクリンとほぼ同時代に生きた。正反対に見えるこの二人の生活態度には意外にも共通点が多い。しかし、エドワーズはその知性の広がりや深さにおいてフランクリンとは全く異なったスケールの宇宙を展開している。出版完成まで51年かかったイエール全集26巻を目の前にするだけで、彼の思想の膨大な奥行きには圧倒されるものがある。ところが、日本では通常、あの「怒りの神の手にある罪人」か、せいぜい大覚醒に関する

著作ぐらしか扱われてこなかった。ながらく、氷山の一角、どころか、大海の一滴、ともいべき極端な矮小化のなかに閉じ込められていた。今回、選集の翻訳が出版されることで、かなりのひろやかな視野をもってエドワーズの壮大さの一端を見つめることが可能となる。それは、私たちの目前に初めて広がる驚愕の世界である。